

医師ビアンシヨンの目

—『人間喜劇』における医学の視点(1)—

松 村 博 史

はじめに — 本稿の目的と方法

ここではバルザックの作品に登場する医師ビアンシヨンの形成過程について考えてみたい。バルザックの『人間喜劇』は、百編近くの小説から成る壮大な作品であり、その世界はさまざまな登場人物が複数の作品に現れる「人物再登場」*le retour des personnages* という手法によって構成されている。ビアンシヨン医師はその中でも登場する作品数が最も多い人物である。彼は『人間喜劇』の小説群でも二十七の作品に登場しており¹⁾、さらにプレイヤード版の第十二巻で『人間喜劇』に付随する草案』として分類されているものでも二作品に登場し²⁾、または言及されている。

しかし興味深いことに、ビアンシヨンという登場人物は、これほど多くの作品で見出されるにも関わらず、決して主役にはならない。どの作品でも多かれ少なかれ活躍するが、自分自身がストーリーの中心に来ることはないという点で、かなり特異な人物であるということが出来る。いわば『人間喜劇』の名脇役とでも言うべき存在である。ここではそうしたビアンシヨンの脇役ぶり、あるいは彼が物語の中で関わるさまざまな事件に対するスタンスの取り方についても考えてみるつもりである。

私自身は、これまでもビアンシヨンについて何度か発表したり論文にまとめたりしてきた³⁾が、今回このようなテーマを扱うことにしたのは、今まで個々の作品について論じてきたものについて、一度全体像をつかむ試みをしてみたいと考えたからである。これまでの延長で他の作品を論じていくこともできるが、『人間喜劇』全体の中で、ビアンシヨンという人物がどのように登場し、成長して、バルザックの小説世界の中でどのような役割を担っているかを改めて捉え直してみたいと考えたのである。

ただ、ビアンシヨンの登場する小説は非常に多いので、一つ一つの小説について彼の行動を見ていくことはできそうにない。またあまり多くの作品を扱っても漠然としたことしか言えないだ

ろう。従ってここでは分析の対象を絞り込むために、一つの方法を取ることにする。最初に、ピアンションがバルザックの作品に登場する過程、そして彼の人物像が形成されていく過程をたどってみたい。それからあとは、少し特殊なケースを扱うことにする。つまり、最初作品が出たときにはピアンションでなかった人物が、後にピアンションに差し替えられたケースをいくつか検討してみたい。

私がいちばん興味を持っているのは、バルザックの小説の中で、ピアンションがどのような位置を保っているか、そしてどのような視点を代表しているのかということである。私は、ピアンションという再登場人物 *personnage reparaissant* は、その生涯よりも、作品全体の中での一つの「視点」として意味を持っているのではないか、そういう意味では「回帰する視点 *point de vue reparaissant*」と言えるのではないかという仮説を持っている。

『人間喜劇』の中のピアンションの視点というのは、バルザックの作品における医学の位置づけとも密接な関係がある。バルザックは人間を身体と精神の両面から観察する方法として、医学を小説に取り入れたいと考えていた。そのような小説家の医学に対する期待を体現する人物がピアンションに他ならない。このような考え方から、『人間喜劇』におけるピアンションの役割を二回に分けて論じていこうと考えているが、全体として、細かい部分の分析を通して全体像が浮かび上がるような論考になればと望んでいる。

1. ピアンションの登場——『ゴリオ爺さん』

バルザックの作品にピアンションが初めて登場するのは、『ゴリオ爺さん』からである。すでに『あら皮』に登場していたラスティニャックがここに初めて「再登場」することで、バルザックの有名な人物再登場の技法が初めて日の目を見るわけだが、三十近い作品に再登場することになるピアンションのキャリアもまたこの作品から始まる。三つの作品にしか出てこないものの、『人間喜劇』の中でも最も印象深い再登場人物である悪党ヴォートランすなわちジャック・コランもまたここで「初登場」しているのと思い比べてみても、これは非常に興味深いことと言えるだろう。

この『ゴリオ爺さん』におけるピアンションの「初登場」については、アンヌ＝マリー・ルフェーブルの87年の論文で詳しく描写されている⁴⁾ので、それに沿って見ていくことにしたい。この論文によると、ピアンションの初登場は、まず手稿の段階で初めてピアンションの名がバルザックによって記される箇所があり、のちにそこから戻って前の部分で訂正され、雑誌『パリ評

論』 *Revue de Paris* に掲載されたテキスト——プレオリジナル版と普通呼ばれる⁵⁾——でピアンションに改められた部分がある。ルフェーブルは前者をピアンションの「真の誕生」“*la vraie naissance*”，後者を「見せかけの誕生」“*la fausse naissance*”と呼んでいる。

それではピアンションの名前がバルザックの手稿で初めて登場する箇所を見てみることにしよう。地方からパリに出てきたばかりの法学部の学生ラスティニャックは、得体の知れない同居人のヴォートランから、出世するには巨額の金が必要であると聞かされ、同じ下宿に住むタイユフェール嬢と結婚してその財産を持参金として手に入れる計画を持ちかけられる。ラスティニャックは一旦は断るが、それでもさまざまに思い乱れる。そうするうちに、彼はピアンションにばったり出会うのである。その場面、

ヴォートランの持論を聞かされたことで、彼は社会のありようについて頭を悩ませていた。その時彼は友だちのピアンションにリュクサンブール庭園で出会ったのである。「何をそんなに深刻な顔をしてるんだい？」と医学生が宮殿の前を散歩しようと彼に腕を組みながら言った。「悪い考えに頭を悩ませているのさ」「どういう種類の考えだい。治るもんだよ、悩みというのは」「どうやって？」「それに身をゆだねることさ」(Ⅲ, p. 164)⁶⁾

この短い場面においても、ラスティニャックとピアンションの性格の違いはすでに見事に描き分けられている。自ら出世への道を踏み出そうとして、その入口で悩んでいるラスティニャックと、そうした生き方に距離をおいて、それを冷静に見つめるピアンションの対比がここには読み取れるのである。このすぐあとで、有名な中国の役人についての会話が出てくるのだが、ここでは置いておく。

次に、バルザックの手稿にはなくて、後に『パリ評論』に掲載された段階で書き加えられた場面である。今読まれる『ゴリオ爺さん』で、最初にピアンションが登場するのも、この場面ということになる。下宿屋ヴォケー館の夕食で、皆が当時の新しい発明であるディオラマにちなんだ「～ラマ」の言葉遊びでふざけているところである。

「さあて、晩飯にしますか。かわいい胃袋がカカトノシタマデ⁷⁾下がってしまいましたからな」とオラス・ピアンションが言った。これは医学生で、ラスティニャックの友達であった。「まったく、冷えラマ^{フロフトラマ}すなあ。ちょっとどいてくださいな、ゴリオ爺さん。何てこった！あんたの足がストーブの口をふさいでるんだよ」とヴォートランが言った。そこへピアン

ションが口をはさんだ。「ヴォートラン大先生! どうして冷えるのをフロワドラマとおっしゃるんですかい。間違っていますぜ。フロワドラマというのが正しい」(Ⅲ, p. 91)

ここで表されているのは、ピアンションの冗談好きの一面である。先ほどの場面でも、まじめに悩むラスティニャックに対して、ピアンションの方はふざけた態度で受け流していた。実は『ゴリオ爺さん』のかなり後の部分まで、ピアンションはこうした態度を崩そうとしないのである。

こうしたピアンションの冗談好きで、皮肉好きな態度、これはあとでも触れるが、バルザック自身の用語で言うならドロラティック (drolatique, おどけ)⁸⁾ ということになるだろう。これはピアンションの冷静な観察家としての側面と一見無関係なように思えるが、実は深いところではつながっている。なぜか。それは、ドロラティックというのは、バルザックでは物事に対して「批判的距離」を取ることを同時に意味するからだ。バルザックの場合、最もふざけていると思われるところで、彼の本音が出ていることがしばしばある。『結婚の生理学』などはその好例だろう。

さて、最初に手稿の段階でピアンションの名前が書き記されたりユクサンブル公園での出会いの場面と、今引用した食堂での冗談めいた会話の場面の間には、頭蓋骨の隆起によって人の性格が分かるとするガルの骨相学の理論をピアンションが適応して、同じ下宿の住人である老嬢ミシヨノーにユダの隆起を、ゴリオに父性愛の隆起を見出すという場面が挿入されている。ただこの箇所については、以前にも分析したことがある⁹⁾ ので、ここでは扱わない。一応参考までに、次の所だけを引用しておこう。

ウージェーヌ (=ラスティニャック) が声を落としていった。「おい、僕たちはゴリオ爺さんを誤解していたようだ。君のガルの理論をあの人に適応してみて、君の考えを聞かせてくれないか。(…)あの人の生活は本当に謎めいていて、研究してみる価値があるぞ。ピアンション、君は笑うけど、僕は本気なんだ。」「あの男は一つの医学的事実だ。よろしい、彼を解剖してみよう」「いや、頭を触ってみてくれよ」「でも、あいつのバカはひょっとして伝染するかも知れないぞ」(Ⅲ, p. 94)

この一節はピアンションの「医学的」な側面を表していると言える。ここでも彼はふざけているが、それに惑わされてはなるまい。ゴリオ爺さんの謎を探ることは、取りも直さずパリという謎めいた対象を研究し、「知る」ことに他ならない。ここでは同時代のパリを科学的——とりわけ

医学的、生理学的——な視点から研究するというビアンシヨンに固有の立場が見られることになるのである。

もしこれまで見てきたビアンシヨンという登場人物の創造の過程が、バルザック研究者たちによって推理されてきた通りとするなら、最初にラスティニャックとの対比で冷静な観察者としてのビアンシヨンの特徴が示され、ついでドロラティックすなわち冗談好きな側面が描かれ、ついで彼本来の属性である医者としてのものの見方が提示されたことになる。ここまでの人物像が書き込まれた上で、物語は後半へと移っていく。

『ゴリオ爺さん』の後半でのビアンシヨンの活躍という、もちろんゴリオの病気を診察し、ラスティニャックと共にその最後を看取る場面が印象的だが、ここでは物語の「展開」への彼の関わりを見るために、他のエピソードを取り上げる。すなわち、彼が植物園でヴォケー館の住人であるポワレ、ミシヨノーと刑事の密談を目撃する一節である。ここでは、ヴォートランが「死を欺く男」の異名を持つ脱獄囚であることが明かされ、彼の正体を暴くための計画が話し合われる。そしてビアンシヨンは、その密談のごく一部だけを耳にはさむのである。

ビアンシヨンはキュヴィエの講義を聞いて帰ってきたところであったが、「死を欺く男」という奇妙な響きの言葉に耳を打たれた。そして「よろしい」という治安警察長官の一言を聞いた。(Ⅲ, p. 193)

ここでバルザックがビアンシヨンに与える情報の匙加減は微妙で、明らかに意識的なものだ。というのも、後になってビアンシヨンはヴォートランに直接このあだ名をぶつけるが、時すでに遅しということになるからである。有名な一節だが、とりあえず引いておくことにする。

ビアンシヨンが言った。「ああそうだ！ おとといミシヨノーさんが『死を欺く男』の異名を持つ男のうわさをしていましたが、このあだ名はあなたにぴったりですね」この言葉はヴォートランに雷に打たれたような効果を及ぼした。彼は青ざめてよろめいたが、その磁気を帯びたような視線はまるで太陽のようにミシヨノー嬢の上に注がれた。(Ⅲ, p. 217)

ビアンシヨンの言葉を聞いたヴォートランは、彼をめぐる陰謀に気付き、追っ手が迫っていることを理解するが、もう手遅れである。ここでビアンシヨンは、陰謀の存在を浮かび上がらせ、これに続く逮捕の場面の緊張感を高めているが、決して彼自身は物語の流れを変えることはない。

手早く見てきたが、これらの部分からだけでも、ビアンションが占めている位置がよく理解できるだろう。というのもここで彼自身は決して事件の当事者になるわけではなく、物語の流れを決定することもない。しかし彼は事件の全体を最もよく俯瞰できる立場にいたのである。ビアンションがこの小説の中で占めている位置あるいは視点は、今後書かれる多くの作品にも共通している。バルザックは『ゴリオ爺さん』でビアンションの視点をはっきりと定めたのである。

2. 人物像の形成——『無神論者のミサ』と『禁治産』

『ゴリオ爺さん』の次にビアンションが印象深い形で登場するのは、1836年の『無神論者のミサ』とそれに続く『禁治産』においてである。この二つの作品は、彼自身が経営することになった『パリ時評』*Chronique de Paris* 紙に、1836年の1月から2月の間に相次いで掲載されたものだが、ビアンションの人物像がバルザックの作品の中ではっきりと確立されるのは、この二作品においてだと考えられる。またこれらの作品は時期的に連続するだけではなく、ビアンションという登場人物を軸にして、物語の構成やその他の要素において共通するところが多く、対にして考えるのが適当であろう。ここで描かれたビアンションの性格、また彼が作品中で果たしている役割とはどのようなものであろうか。

まず『無神論者のミサ』では、デプランの天才についての説明に続いて、ビアンションの人物像が詳細に描かれる。『ゴリオ爺さん』に見られるビアンションは医学生期の若者だったが、ここでの彼はすでに医者としての名声を確立している。この作品でも彼の若い頃のヴォケー館の生活に触れているのは、バルザックがこの時期に盛んに人物再登場のつながりを組み立てつつあったからであろう。彼の性格を描いた部分は、私自身大好きな一節だが、そこから引用してみる。

清廉の士でも説教家でもなく、忠告を与えながら神を呪う言葉を吐きもすれば、機会があれば自ら進んで派手な宴に加わりもした。よき仲間として、鎧の兵隊ほどにも上品ぶることはなく、今日ではすっかり狡猾な外交官になり果てた水夫のようにではなく、人生で何のごまかしもない若者のように円満で率直な人間として、昂然と頭を上げて朗らかな考えを抱きながら歩んでいた。(Ⅲ, p. 388)

まるでバルザックが自分のことを語っているかのような、美しい描写である。バルザックは『人間喜劇』の至るところで、あらゆる階層のさまざまな種類の人物を詳細に描いているが、こ

のように思い入れたっぷりに綴られた描写が他にあるだろうか。

この小説におけるビアンシヨンは、彼の師である外科医デプランが若い頃の話をする、その聞き手としての役割を担っている。彼は無神論者であるはずのデプランが、サン＝シュルピス教会に入ってミサを聞いているのを数度にわたって目撃する。こうした師の奇妙な行動を長年にわたって忍耐強く観察した結果、その動かない証拠を突きとめて、ついにデプランからその理由を聞き出すのである。次のような一節は彼の観察能力が並々なものではなく、しかも科学者の経験に裏打ちされていることを表している。

ビアンシヨンはきっとデプランの様子を窺おうと心に誓った。彼は先生がサン＝シュルピスに入るのを目撃した日時を思い出して、来年も同じ日時に行ってみて再び先生がそこにいるかどうか見てやろうと心に決めた。その場合、デプランの信心がこのように周期的に巡ってくるからには、科学的調査の対象となりうるであろう。というのは、このような人にとっては、思想と行動が直接的に矛盾することはあり得ないからである。(Ⅲ, p. 392)

そして彼がついにデプランの秘密を聞き出す場面である。

ビアンシヨンが言った。「あなたが今ここでなさっていたことの原因を知りたいのです。あなたがなぜこのミサに寄進なさったのかということ」デプランは言った。「確かに、私ももう墓のふちにさしかかった。もう君に私の人生の最初の頃の話をしてもいいだろう」(Ⅲ, p. 393)

この物語でもまた、ビアンシヨンの観察力の高さ、そして秘密を探り出す巧妙さが前面に出されている。だがその一方で、目に付かないながらも確実に存在する彼のもう一つの能力、『ゴリオ爺さん』には見られなかった彼の新しい能力がここで初めて導入されている。それはビアンシヨンの「語り手」としての才能だ。

デプランがオーベルニュ出身の水運び人を妙に大事にすること、そして彼が数回にわたって教会に足を運んでいることを知っているのはビアンシヨンだけである。そしてデプランは、彼の最期を看取ったビアンシヨン以外の誰にもこの秘密は明かしておらず、ビアンシヨンもそれを胸の内にとめていたことが暗示されている。すなわち、この『無神論者のミサ』を「語る」ことができるのは、作者のバルザックを別にすればビアンシヨン以外にはないのである。

『無神論者のミサ』と、これに続いて発表された『禁治産』の間には多くの共通点がある。ビアンションが登場するというだけではなく、この二つの作品において、彼は年上であり友人でもある偉大な人物の相棒となり、その人物を補佐する役目を担っている。『無神論者のミサ』ではそれが外科医のデブランであり、『禁治産』ではビアンションの伯父でもある判事のポピノである。デブランとポピノは、ともに鋭い観察能力を持つ人物であり、黙々と自らの職務を全うする人間であることも共通している。

『禁治産』において、ビアンションは、ポピノがカルチエ・ラタンの貧民街で人に知られず慈善事業を行っているのを助け、近所の貧しい病人たちを無料で診察し治療している。こうしたことから彼は友人のラスティニャックに頼まれてポピノをデスパール侯爵夫人に引き合わせることになり、夫人が夫の侯爵に対して起こそうとしている禁治産の訴訟の内訳を知ることになるのである。ここでは彼がこの事件にどういう形で立ち会っているかを中心に見ていくことにする。

まずビアンションがポピノ判事にデスパール侯爵夫人の話題を出すと、判事は彼に、侯爵夫人からの請願書をコメントをはさみながら読み聞かせる。ビアンションは彼の叔父にデスパール夫人に会いに行くように強く勧め、ポピノもそれでようやく承知するのである。物語の筋を追う限りでは目に付きにくいのだが、ビアンションはこの会見にもポピノに同伴している。

こうしてポピノ判事は今を時めくデスパール侯爵夫人に会いに行くことになり、その会見の場面で、彼はこの上流階級の夫人の残忍な正体と、禁治産の請願の裏にある企みを見破ることになる。そこは次のように書かれている。

こうして相手を手玉に取りながら、判事はこの女の傷を暴いたのであった。いかにもブルジョワめいて人の良さそうなポピノの顔つきは、侯爵夫人、シュヴァリエ、ラスティニャックの笑いを誘うものであったが、それが彼らの目に真実の容貌を現したのである。(Ⅲ, pp. 465-466)

ここでビアンションの存在は注意深く隠されているが、ここの四人を外から観察する立場にあるのは彼しかいない。他人の表情を観察し、デスパール夫人の「傷」に目を向けるのは、まさに医師ビアンションならではの視点とすることができる。

そしてこの会見のあとに、帰りの馬車の中での会話が続くのだが、ビアンションはポピノに、「この事件の結末がどうなるのか、僕はぜひ知りたいものですね」(p. 468)と漏らしている。このビアンションの好奇心、それは同時に「物語」に対する好奇心と言ってもいいだろうが、それ

は彼特有のものである。しかし不思議なことに（あるいは残念なことに）この作品でのビアンションの役割はここで途絶えてしまっている。このあとポピノは夫のデスパール侯爵を訪問してこの真実を知るのだが、侯爵夫人宅で出された紅茶がもとで訴訟からはずされる。こうしてこの一件は、夫人の思惑通り禁治産請願が通る方向に大きく傾くのである。

しかしここでもビアンションは、事件の当事者を知り、事件の全貌を知るのに格好の立場にいるわけで、彼が望んだこの事件の顛末は必ずポピノから聞かされたことであろう。だがまことに興味深いことに、実はこの事件はここでは終わらないのである。これは後日譚になるのだが、別の小説『娼婦盛衰記』の中で、この禁治産の請願が、予想された方向には進まなかったことが明かされるのだ。その一節。これは1843年6月に発表されたテキストで、質問に答えているのはビアンションの友人のリュシアン・ド・リュバンプレである。

「それにしても、あなたはいったいデスパール夫人に何をしたのですか」「私は愚かにも、セリジー夫人のお宅で、ボーヴァン氏やグランヴィル氏のおられる前で、デスパール夫人が夫の禁治産を得るために起こした訴訟の話を、冗談半分に話してしまったのです。これはビアンションが私に打ち明けてくれたことでした。グランヴィル氏の意見は、ボーヴァンとセリジーにも支持され、それが大法官の意見を変えてしまったのです。彼らは『法廷新聞』のスキャンダルに尻込みして、それで侯爵夫人はこの恐ろしい事件に終止符を打った裁判の判決理由の中で責めを受けることになったのです」(VI, pp. 513-514. 下線は筆者による)

この引用からは、ビアンションがデスパール侯爵夫妻に関わる訴訟の話を語る能力を持っており、友人のリュシアンに実際それを語ったことが理解できる。そして本当にまれなことだが、ここでビアンションはそれを「語る」ことによって間接的に事件の流れを変えてしまったのである。

3. ビアンションと医者 の 視点

これまでのところで、『ゴリオ爺さん』で初めて登場したビアンションが、『無神論者のミサ』と『禁治産』でその人物像を完成していく過程を見てきた。本稿の狙いは、最初に述べたように、ビアンションという医者 の 登場人物がバルザックの作品の中で占める位置とはどういうものか、彼の視点はどういう性質のものかを知ることにある。ここで少し見方を変えて、違う方向からこの問題を考えてみることにしたい。

これから取り上げようとするのは、当初は違う登場人物で設定されたものが、後になってピアンシオンに差し替えられた場合である。このような例を考察してみると、かえってピアンシオンが物語の中で占めている位置がはっきりと浮かび上がるように思う。その作品というのは、最初にそれらのテキストが書かれたと思われる順に見ていくことにするが、『女性研究』、『二重家庭』、そして現在は『続女性研究』に収められている『グランド・ブルテッシュ館』である。他の人物からピアンシオンに差し替えられた代表的な例としては、この他に『あら皮』の四人の医者による診察の場面などもあるが、これは長編小説でもあり、また私自身以前に論じたこともある¹⁰⁾ので、ここでは取り上げない。今回は、当該の登場人物の存在が、物語全体の筋立てに関わるケースを中心に扱いたい。

a) 『女性研究』

最初は『女性研究』である。この作品は当初、1830年3月に『ラ・モード』誌に掲載された。それから翌年にゴスラン書店から出された『哲学的長短編集』*Romans et contes philosophiques*に収められている¹¹⁾。この作品については、道宗照夫氏が『バルザック生誕200年記念論文集』や『「人間喜劇」研究』¹²⁾で詳細な分析を試みておられるので、ここで手短かに何か言おうとするのは気が引けるのだが、ピアンシオンの役割に焦点をしぼって、いくつかの点を考察してみたい。

この物語は少し変わった構成を持っている。というのも、最初はある貴族の女性についての客観的な描写から始まり、それからその女性の知人であり、よき話の聞き手である一人称の語り手(「私」)が導入される。そして女性が舞踏会で出会った若い男の話に移っていく。この女性は初出の段階では匿名であり、若者はエルンストという名前を与えられていたが、それが1835年に『パリ生活情景』に収められた時点でリストメール侯爵夫人とラスティニャックに変わった。この二人はともに読者にはお馴染みの再登場人物であり、こうしてこの小話はバルザックの作品世界にしっかりと組み込まれたことになる。

さてその若い男性が自分の部屋で手紙を書き終わってぼんやりしているところに、語り手が入って行って、その若い男から呼びかけられる。その部分を引用してみよう。

私がウージェーヌの部屋に入っていったのはそのときだった。彼は椅子から跳ね起きて私に言った。「ああ、何だ君か、オラス。いつから来ていたんだい」「いま着いたところだよ」「そうか」彼は二通の手紙を取り上げて、住所を書くと、呼び鈴を鳴らして召使いを呼んだ。

(II, p. 174)

ここで問題になるのは、この一人称の語り手「私」の正体である。プレイヤード版の『人間喜劇』では、版により異なる作品のヴァリエーションを順にたどれるようになっているが、それによれば、当初匿名の語り手に向かって呼びかけられていたものが、1835年の時点で「ラファエル」となり、さらにそれが1842年のフルヌ版で「オラス」に変わっている¹³⁾ ことがわかる。バルザックの作品の文脈からすると、ラファエルは『あら皮』の主人公であるラファエル・ド・ヴァランタン、オラスはオラス・ピアンションを指すと考えるのが妥当であろう。つまり匿名のままなら普通の一人称の物語だが、最終版を見れば、『人間喜劇』の読者はそれまでバルザックの声と思って聞いていたものが、実は登場人物であるピアンションの語りだとわかって、軽い驚きを感じるようになるのである。アランなども、ピアンションについて書いた一節の中でそうした驚きを表明している¹⁴⁾。

この場面で、後にラスティニャックに改められる若い男性が、過って手紙を違う女性に宛ててしまったことが物語の軸になるだが、その間違いを目ざとく観察して証言するのも語り手、すなわち後のピアンションである。そこの引用を見るところ。

「ジョゼフの言う通りだよ」と私が言った。ウージェーヌは私の方を振り向いた。「僕は別に何げなく住所を見たんだ。そうしたら……」「そうしたら、手紙のうちの一通はニュシゲン夫人宛じゃなかったのかい」とウージェーヌは私の言葉をさえぎって言った。「ああ、誓ってもいいね。それに、僕は君の心がサン＝ラザール通りからサン＝ドミニック通りへとくると向きを変えたのがわかったよ」(Ⅱ, p. 176)

ささいなことも見逃さない観察力と、そして物語の要所にさりげなく身を置いているという点は、まさにピアンションに特徴的なところと思われる。

それでは、ピアンションが医者であると言うことが、この物語で何らかの意味を持っているのかという点を、次に考えてみたい。この物語の語り手の資質の中で、医者という職業に結びつきやすいのは、やはり上にあげたような鋭い観察力だろう。とくに、それが身体に向けられたときには、語り手がピアンションであることが新たな意味を持ってくる。例えば、次のような一節がある。ラスティニャックがリストメール侯爵夫人の家を尋ねたときのことだ。

こうして彼が自分の秘密を打ち明けたことで、リストメール夫人は激しく動揺した。しかしウージェーヌはまだ、女性の顔を盗み見たり横から眺めただけで分析することにたけていな

かった。そのとき、侯爵夫人の唇だけが軽く青ざめただけだった。(Ⅱ, p. 179)

この引用などは、『禁治産』の冒頭で、デスパール侯爵夫人にのぼせ上がっているラスティニャックに対して、ビアンションが顔のいくつかの特徴を冷静に観察して、彼女の本当の年齢や性格を言い当てているのと比べてみることができるだろう。ここで面白いのは、この場面には本来ビアンションは居合わせていないということだ。ラスティニャックが侯爵夫人の唇の色の変化に気付かなかったのなら、では誰がそれを見たのかという話になるが、ここでは語り手ビアンションと作者バルザックとの境界が半ば曖昧になっていると考えるべきだろう。

さらに、この語り手がビアンションに変わったのは、前に述べたとおり1842年のフルヌ版からだが、この変更とともに物語の最後に次のような一節が付け加えられている。

私は夫人を看病して、その秘密を知っているのだが、彼女はほんのちょっとした神経の発作を起こしただけであって、それをいいことに外出せずに家にとどまっていたということであった。(Ⅱ, p. 180)

この数行によって、ビアンションは物語の要所を今ひとつ押さえたことになるわけで、バルザックは物語の語り手をビアンションに変更するのに、さして躊躇することはなかっただろう。

b) 『二重家庭』

次は『二重家庭』だが、この作品の初出年代はほとんど『女性研究』と隣接している。『女性研究』は1830年3月、そして『二重家庭』は同じ年の4月に、『貞淑な妻』のタイトルで『私生活情景』の第2巻に収録されて出版された¹⁵⁾。裁判官であるロジェ・ド・グランヴィルは、刺繍の仕事をしながら貧しい暮らしを営んでいるクロシャール母娘と知り合い、やがて娘のカロリーヌにアパートマンを与えて家庭を築き、二人の子供も生まれる。しかしグランヴィルには実は本来の家庭があり、そこでは彼は信仰に凝り固まった妻のために殺伐とした年月を過ごしてきたのであった。やがて彼はその信心深い妻と決裂する。しかし第二の家庭の方も、カロリーヌが賭けに熱中する若い男のもとに走ったために、破滅に至ってしまう。以上が物語の筋立てである。

この物語の最後の数ページ、カロリーヌが子供たちとともに貧困にあえぎ、病気に苦しんでいる部屋の窓を、グランヴィルが沈痛な面持ちで見上げているところに、医者が登場する。彼はそのカロリーヌの部屋から看病を終えて出てきたところで、グランヴィルを見かけたのであった。

その場面、

「私はまだ五十五歳ですよ。私にとっては不幸なことにね」とグランヴィル伯爵は答えた。「あなたのように有名な医者なら、その年齢の男はまだまだ壮健の極みにあることはご存じでしょうに」とオラス・ビアンシヨンが言葉を続けた。「やれやれ、まったくお盛んなことで。あなたならパリの町なかを徒歩で行くような習慣はお持ちでないでしょう。立派な馬を持っておられるのですから」(Ⅱ, p. 78)

この引用のビアンシヨンは、1842年のフルヌ版から差し替えられたもので、それ以前は匿名の医者になっていた。ここでの医者は、最後の場面に少し登場するだけで、限られた役割しか与えられていない。しかしその一方で、窓の向こうの病人に一見したところ何の同情も示そうとしないグランヴィルに、不幸から来る病氣、すなわち心の病氣を指摘し、それを治して見せようと誓うのである。

「あなたはある病氣を抱えておられるようです。私に治させていただきたい」とビアンシヨンが動揺に震えた声で言った。「あなたは死を治療する方法をご存じだということか」と伯爵が苛立って叫んだ。「お任せください、伯爵さま。あなたが冷え切ったと信じておられる心を、きっともう一度感動させて見せますよ」(Ⅱ, p. 80)

この医者は、結局伯爵の「病氣」を治癒するには至らないのだが、その傷に触れて、彼から部分的な告白を引き出すことには成功している。それが次の引用である。

「彼女の名はカロリーヌ・クロシャールというのだろう」と伯爵は目に見えてやつれた声で尋ねた。「ご存じなのですか」と医者は驚いて言った。「それから、あの哀れな男はソルヴェと言うのだ。ああ、あなたの言葉通りになった！」と伯爵は叫んだ。「あなたは私の心を世にも恐ろしい感情でかき立てたのだ。その苦しみはこの心が塵となって消えるまで続くことだろう」(Ⅱ, pp. 81-82)

ここでのビアンシヨンは、部分的にしか登場していないが、それでも人の人生の最も危機的な瞬間に立ち会い、その証言を残すという役割は果たしている。このあと、伯爵は心の傷を抱えたま

まイタリアへと出奔することになるのである。

この作品についても一つ興味深いことがある。バルザックはこの作品の第三版を、1835年11月に『十九世紀風俗研究』の「パリ生活情景」に収録しており、その時に改訂を行っているのだが、そこでは匿名の医者そのまま残して、この人物をビアンションに変えることはしていないのである。その一方で、1835年の1月には『ゴリオ爺さん』が『パリ評論』の連載を終え、3月には本となって出ている。このことは一見不思議に思われるが、考えてみると1835年の時点ではビアンションはまだ医学生でしかないのだ。彼が医者としての名声を確立し、バルザックの作品中で医者のプロトタイプとして定着していくのは、やはり1836年の『無神論者のミサ』と『禁治産』の二作品を待たなくてはいけないのだろう。

c) 『グランド・ブルテッシュ館』

当初他の登場人物であったものが、後にビアンションに差し替えられた三つ目の例として、最後に『グランド・ブルテッシュ館』を見ておきたい。この作品は、現在は『続女性研究』の末尾に収められているが、そこに落ち着くことになったのはようやく1845年になってからである。『グランド・ブルテッシュ館』は、妻がスペインの貴族と浮気していることを察した伯爵が、妻の部屋の物置をそこに隠れている妻の愛人とともに壁に塗り込めてしまうという、要するに夫が妻の姦通の復讐をする物語である。

『グランド・ブルテッシュ館』の初出は1832年の『私生活情景』の第二版で、『忠告』という作品の中で「ことづて」と組み合わせられている。ここでの語り手はオーギュスト・ド・ヴィレーヌというディレクタントで、機知に富んだ会話と小話を得意とする人物になっている。その語り手がビアンションに変更されるのは1837年のことで、『グランド・ブルテッシュあるいは三つの復讐』というタイトルで、『十九世紀風俗研究』の「地方生活情景」に収められていた。現在このエピソードは『地方のミュージズ』の一部となり、そこではラ・ボードレ夫人が貞節を保っているかを試すために、三人の人物がそれぞれ夫の復讐にまつわる話をするという設定になっている。ビアンションはその文脈において『グランド・ブルテッシュ館』を語るのである¹⁶⁾。

この『三つの復讐』から『続女性研究』に至るまで、『グランド・ブルテッシュ館』の語り手としてのビアンションは、医者というよりも小話の名手としての面が強調されているようである。しかしながら、この物語の語り手の身体に関するきめ細かい観察力や、秘密を巧みに引き出す能力などは、ビアンションに割り当てられるのが最もふさわしいだろう。例えば語り手は、メレ伯爵夫妻についての最後の秘密を握る女中のロザリーについて、次のような観察を行っている。

ロザリーは私の目に、ヴァンドームでももっとも興味を惹かれる女性と映るようになりました。ぽっちらりと肉の付いた顔に輝くような健康さの中にも、よく見れば秘められた思いの影が見受けられました。この女の心の中には、良心の呵責か将来への期待が支配しているようでした。彼女の態度はある秘密の存在を示していました。(Ⅲ, p. 722)

他人の身体を観察して、その奥にある苦しみを見抜くというのは、まさに医者としての適性に他ならない。

ここでは詳しく扱わないが¹⁷⁾、ピアンションのこのような能力は、建物としての「グランド・ブルテッシュ館」にも向けられている。彼はその家自体が苦しみにあえいでいるのを看破するのである。そしてこのような観察は「地方」というものが抱えている病にまで及ぶのである。この物語の冒頭には、この館の庭の描写が見られるのだが、その中に次のような一節がある。

私にとってこの隠れ家は、不幸の翳りを落とされた人生のありとあらゆる光景を表していたのです。それは時には僧たちのいない寺院の回廊であり、また時には墓碑銘からさまざまに語りかけてくる死者たちのいない墓場の静けさでした。ある日には癩病院となり、次の日には呪われたアトレウス一族の家ともなりました。しかしそれはとりわけ瞑想的な考えと砂時計のような生活に象徴される地方そのものだったのです。(Ⅲ, p. 712)

さらに数行先には次のような文も見られる。

ある晩など私は身震いを覚えたことがありました。一陣の風が古くさび付いた風見を回し、そのきしむような音がこの家のたてるうめき声のように聞こえたのです。私はまさにその時しも、このように遺跡と化した苦悩を説明しようとして一編のドラマを完成しようとしていたところだったのです。(Ibid.)

これらの引用からは、グランド・ブルテッシュという謎めいた建物が、それが内包する秘密も含めて地方の病を象徴していることが読み取れるだろう。このような観点から見ると、【グランド・ブルテッシュ館】という作品も、単なるサロンの小話にとどまらず、一編の凝縮された「地方生活情景」であることが理解できる。そうなれば、これはまさしくピアンションに語られるべき物語であるように思えてくるのである。

これまでいくつかの作品について、前には他の登場人物であったものが、後にピアンションに差し替えられた例を見てきた。これらの例からも、『ゴリオ爺さん』に初めてピアンションが登場する以前から、彼のような視点や役割を持った人物が点在していたことがわかるだろう。特にピアンションの場合には、他のバルザックの登場人物の場合のように、その生い立ちや命運をたどっていくのではなくて、ある視点によって複数の作品が結ばれているように思われる。それは人間のさまざまな秘密に立ち会う目であり、さまざまな形の苦しみに向けられた目であるだろう。バルザックの作品の中で、そうした視点が次第にピアンションという一人の医者的人物像に結ばれていったのである。そういう意味で、ピアンションというのは、再登場人物であると同時に、回歸する視点 *point de vue reparaisant* だと言えるだろう。

4. その後のピアンション

『ゴリオ爺さん』で初めて登場し、『無神論者のミサ』と『禁治産』でバルザックの作品中の医者のプロトタイプとして定着したピアンションは、それ以降の作品にもしばしば登場する。その中には、『幻滅』でダルテーズのセナークルに加わって、リュシヤンの作品の批評をしている彼や、『地方のミュージズ』で名士として登場し、サンセールでくすぶっていたラ・ボードレ夫人と友達のルストーを結びつけて去っていく彼もあるだろう。

しかしバルザックの作品中のピアンションの役割として、特に印象に残るのは、医者として、さまざまな人物の病気と死に直面する彼の姿だと思われる。死というのは、やはりそれぞれの人間にとっての至高の瞬間であり、また多くのバルザックの登場人物にとって、長い間包み隠してきた秘密が暴かれる契機でもある。そうした点からも、ピアンションのこの側面は、これまで見てきた彼の役割から言ってもうなずけることだろう。

身近に思いつく例を挙げていっても、重病に陥ったピエレットの治療に当たり、この幼い少女が受けた虐待に対して義憤を発している彼がいる。また『ラブイユーズ』では、友人のジョゼフ・ブリドーの母親であるアガットの看病にも当たっているし、「ラブイユーズ」の異名をとったフィリップ・ブリドー夫人の死に際しては、「すでに滅びたと思われていた驚くべき病氣」を発見して、科学者としての興奮にとらわれている。

また『村の司祭』では、ヒロインのグララン夫人を診察して、彼女が身につけていた苦行服に憤り、彼女の死にも立ち会っている。パリでも、『従妹ベット』では、クルヴェルとその妻になっていたヴァレリー・マルネフが「未知の病原から来る血液の汚濁」による病気に苦しんでい

るとの診断を下し、その一方でベットの気管支の病気による死を予告するのもピアンションである。

これらの登場人物たちの病気や死は、恐らくフランス社会が抱えている病を象徴しており、それに向かい合うピアンションの態度は、作家としてのバルザックの姿勢とも重なるだろう。ただ、ピアンションのこのような側面については、ここではもう十分に扱うことはできない。ピアンションのこうした側面、病気と死に向き合うピアンションについては、また機会を改めて、別の論考で扱うこととしたい。

注

- 1) ピアンションの登場する小説は、バルザックの最もよく知られた作品からでも『ゴリオ爺さん』『幻滅』『あら皮』『従妹ベット』など数多く挙げることができる。
- 2) “Ébauches rattachées à *La Comédie humaine*”, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. XII, 1981. この二作品とは *Échantillon de causerie française* と *La Femme auteur* である。
- 3) 「『グランド・ブルテッシュ』あるいは病める身体を語る」ボルドー第3大学でのシンポジウム「文学と医学」における口頭発表（フランス語）、1997年、紀要 *Eidôlon*, Université de Bordeaux 3, 50, 1997に掲載、
「バルザックと「統合の医学」——『あら皮』の一場面に窺われる医学観」日本仏語仏文学会1998年春季大会における口頭発表、学会誌 *Études de langue et littérature françaises*, n° 74, 1999年に掲載、
「『ゴリオ爺さん』における人相の科学」（フランス語）、*Equinoxe*, 19, 2001年など。
- 4) Anne-Marie Lefebvre, “Bianchon, cet inconnu”, in *L'Année balzacienne 1987*, pp. 79-92. ルフェーブは後にピアンションを中心とする『人間喜劇』の医者タイプの研究した大部の博士論文を完成している。“Le type de médecin dans *La Comédie humaine* d'Honoré de Balzac”, thèse soutenue en 1993 à l'Université de Paris IV-Sorbonne.
- 5) “Histoire du texte” du *Père Goriot*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1976, pp. 1209-1216.
- 6) *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1976. 以下の引用文においても、ローマ数字の巻数とページ番号はこのプレイヤード版『人間喜劇』に依拠するものとする。
- 7) この部分の原文は *usque ad talones* で、ピアンションはラテン語を使ってふざけている。
- 8) バルザックには、十六世紀の作家フランソワ・ラブレーなどの文体を模倣して書いた作品『コント・ドロラティック (*Contes drolatiques*, 風流滑稽譚)』がある。
- 9) 「『ゴリオ爺さん』における人相の科学」（フランス語）、前出。
- 10) 「バルザックと「統合の医学」——『あら皮』の一場面に窺われる医学観」、前出。
- 11) “Histoire du texte” d'*Étude de femme*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1976, pp. 1275-1276.
- 12) 「『女性研究』小論」、『バルザック 生誕200年記念論文集』（日本バルザック研究会編、駿河台出版社、1999年）pp. 229-243、
道宗照夫『バルザック「人間喜劇」の研究（一）』（風間書房、2001年）、『女性研究』pp. 399-418。

- 13) “Notes et variantes” pour *Étude de femme*, *ibid.*, pp. 1278-1279.
- 14) Alain, *Avec Balzac*, 3^e édition, N.R.F.-Gallimard, 1937, p. 108. (アラン『バルザックとともに』)「人はここでバルザック自身が我に返るのだと思うだろう。ところがそのとき初めてそれがオラス・ピアンションだと気付くのである。ここでは小説の手法が作者自身を欺いたのだと言えそうである」
- 15) “Histoire du texte” d'*Une double famille*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1976, pp. 1221-1223.
- 16) “Histoire du texte” d'*Autre étude de femme*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1976, pp. 1487-1488. 『人間喜劇』の最終形態であるフルヌ訂正版においては、『グランド・ブルテッシュ館』の物語は『続女性研究』の最後に定着し、『地方のミューズ』では言及はされるが、物語の内容までは語られていない (éd. de la Pléiade, IV, p. 688)。
- 17) 筆者は以前にもこの作品については詳細な分析を行っている。『グランド・ブルテッシュ』における語り手の位置」(パリ第7大学のDEA(博士論文準備過程)論文(フランス語), 1997年提出), 『グランド・ブルテッシュ』あるいは病める身体を語る」(前出)を参照。